



# ウズベキスタンの 細密画 中山恭子

掲載できないのが残念ですが、ウズベキスタンの古都サムルカンドで二百年程前に漉かれた古い紙に描かれた細密画がここにあります。

細密画の題材は幅広く、歴史や文学の一場面そして日々の暮らし全てが対象です。この国でもっとも愛されている詩人アリシエル・ナヴォイのロマンに満ちた叙事詩のシーンはマスターたちによって競って描かれています。

かつてこの国には、サムルカンドの紙と呼ばれる美しい紙がありました。751年、中央アジアの覇権をかけた「タラス河畔（現在のキルギス北部）の戦い」で唐はイスラム帝国に大敗し、多

くの唐兵が捕虜となりました。この捕虜の中に紙漉きの職人がいて、その製紙技術がこの地に伝えられました。

捕虜となった製紙職人はサムルカンドに運ばれ、その後サムルカンドの製紙業は長きに亘り名声を博したと伝えられています。インドムガル朝の創設者であるバーブル（1483-1530年）の自叙伝「バーブル・ナマ」には、「世界において良き紙はサムルカンドより出づ」と称えられています。（中央ユーラシア事典）

このような誇り高い歴史を持つ手漉きの紙は20世紀に入ると近代的な工場で生産される上質の洋紙に取って代われ、サムルカンドの紙はすっかり姿を消してしまいました。今ウズベキスタンでは日常使う紙も輸入に頼っており、紙はすべて大変貴重なものとなっています。

しかしこの国に伝わる細密画の鮮やかな色を保てるのは昔漉かれた紙だけです。細密画のマスターたちはわずかに残っている古い手漉きの紙を捜し求め、小さな小さな切れ端の紙も大切に、極細の筆で独特の世界を表現しています。昨年出版した滞在記「ウズベキスタン



中山恭子(なかやまきょうこ) 1940年生まれ。東京大学仏文科卒業後、大蔵省入省。四国財務局長、大臣官房審議官、国際交流基金常務理事を歴任。ウズベキスタン・タジキスタン両共和国特命全権大使を務め、2002年より内閣官房参与として北朝鮮拉致問題に取り組む。現在は早稲田大学大学院客員教授。この9月より内閣総理大臣補佐官。著書に『ウズベキスタンの桜』。

早稲田大学「大隈庭園」にて

の桜」にも随所に細密画を載せました。

＊ ＊ ＊  
笹の葉サラサラ、軒端にゆれると口ずさみながら折り紙を折る私の傍らで、「3番まで歌えるの」と孫娘が少し恥すかしそつに一緒に歌ってくれます。美しい千代紙で鶴や奴や屋形船などを一人で飽きず折り続けました。赤や黄色や紫の色とりどりの色紙で長い鎖や七夕飾りを夢中で作った幼い日を思い出すひと時でした。

子供の頃から美しい紙を手元において過しせる幸せ、日本各地で作られる芸術品とも言える手漉きの紙を思う存分使うことのできる幸せをしみじみと感謝しながら、ウズベキスタンで伝統的な技法による手漉きの紙が復活することを、そして日本人に良く似たこの国の子供たちにも紙の美しさ、楽しさを知ってもらいたいと、願わずにはいられません。

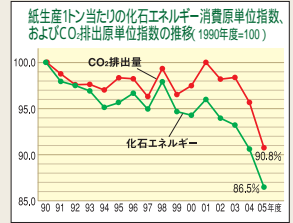
## PAPER Q & A Vol.8

Q. CO<sub>2</sub>を減らすために、どんな対策を採っているのですか？

A. 省エネに加えて、新エネルギーへの転換を図っています。

地球温暖化を防ぐためには原因の一つであるCO<sub>2</sub>の排出量を減らすことが重要です。紙パルプ産業では、紙をつくるときに使うエネルギーをできる限り減らすために製造工程の工夫や、エネルギー効率の高い設備やシステムに切り替えることで省エネを実現。また、木くずなどの「廃棄物エネルギー」といった環境負荷の少ない燃料への転換も積極的に進めています。こうした積み重ねが実を結び、2005年度には、紙を1トンつくるために使う石油や石炭などの化石エネルギーは1990年度と比べて86.5%、CO<sub>2</sub>排

出量は90.8%に削減。2010年度までにそれぞれ87%、90%をめざし、さらに努力を続けています。



資料：日本製紙連合会

今回は1月4・11日号、北野さんです。